



町民文芸

只見短歌会 令和三年三月詠草

飢餓の子の骨ばかりなる痛ましき泣く力さえ無くて佇む
馬場 八智

ブルトージャー入りて通路の雪の壁三メートル越ゆ春の陽迎ふ
関谷登美子

雪嵩ゆきかさが除よけてくるるか隙間風入らぬ窓辺さくら草咲く
目黒 富子

戦争と勤勞奉仕の国民学校出て来たわれら「米寿」の祝ひぞ
渡部ゆき子

連日の雪に慣れぬし我が仔猫雪の落つるを窓際で見つ
新国由紀子

受付は早く終われど診察に待つ時間の長く眠りを誘ふ
渡部ヨリ子

こぼし苑入所の人等それぞれに無理せず朝の体操をする
新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会 三月定例会

宇多喜代子 指導

まだまだと若木のごとく杏子咲く
青い目の人形語る春日和
信

伊南川や明かるく見えて冴返る
かくれんぼいつも鬼なり春の風
都

ほっこりと障子ごしの灯母の影
外套や父の背中の広かりき
味代子

コロナ禍が普通を奪う老いの冬
山里に小さき白波雪解川
弘子

細き身に羽震わせる春の蠅
粗目雪足跡追って吟行す
真理子

さくらもち味をかみしめ心豊かに
朝霧やすずめの群が窓をうつ
睦子

暮れかぬる大根にゆうのくずれかな
只見川に入る伊南川の雪解ぶり
礼

健康器クルミの手遊び春待つ日
まだ雪の残る畑隅ヒヤシンス
一穂

日捲りをめくる贅沢深雪晴
ほっこりとホテルの明かり冬木立
修一

漣を起こして蝌蚪の群れ朗ら
コロナ禍の冬愚痴一つ芋刺しに
幸生